

誕生から5年が経った地域SNS

——全国フォーラムin千葉での議論から

2月20日、千葉大学けやき会館（千葉市）を会場に「第6回地域SNS全国フォーラム」（同実行委員会主催、虎岩雅明委員長）が「まちの『こんにち』を目指して」をテーマに開催された。国内初の地域ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）「ころっとやっちょろ」（熊本県八代市）の誕生から5年。全国で500以上ともいわれる地域SNSのリアルな姿をフォーラムでの議論からレポートする。



大会実行委員長を務めたNPO法人 TRYWARP 代表理事の虎岩雅明さん。「情報共有よりも気持ちの共有が大切」と語った。

人の輪をつくるツール

「10mの海苔巻きをみんなで作ってガブッとかぶりつく。それで人の輪を作ろうというのはわかるが、目に見えない（地域SNSという）ツールを使って同じことができるのは、なんとも不思議だ」

本大会前日に千葉県山武市で開催された「山武分科会」の主催者挨拶で、同市の椎名千収市長は、そう率直な感想を述べた。山武市は市民活動の活性化などを目指して地域SNSの構築を準備中だ。

続いてインフォミーム株式会社代表取締役で地域SNS「ひよこむ」の協働運営者でもある和崎宏さんがフォーラムの開催主旨を説明。市長の疑問に答えて「地域SNSは地域情報化のツールとしてまだまだ全国に知られていないが、地域の人の絆をつなぎ直し、人を元気にする場面が全国で見られるようになった」と、人のつながりを促進・サポートするコミュニティ機能を強調した。

インターネット中継で登場した兵庫県企画県民部長の牧慎太郎さんは新年度事業で取り組む電子地域通貨「ひょうごポイント」での地域SNS

活用などの事例を紹介したほか、「今後はデジタル放送やカーナビでも地域SNSを使えるようにICTツールとしての進化も図っていきたい」と抱負を述べた。

その後に関われたセッションでは「しなやかなつながりの創造——人にやさしい地域SNSとは」と「つながりの覚醒——街を元気にする地域SNS」の2つのパネルディスカッションが行われた。地域SNSに関わる4人の女性らによる前半のセッションの中で、NPO法人山武IT推進協会理事の小島妃佐子さんは「ひよこむ」に間借りして始めたコ

ミュニティ「さんぶの森の仲間たち」の運営を通して、「楽しむ」「伝える」「集う」「交わる」という地域SNSの機能を活かすには、顔の見える安心できる信頼関係の構築が前提になるとまとめた。

「出会った系」が地域を活性化する

翌日の本大会は開会式の後、午前中に、大会実行委員長を務めるNPO法人TRYWARP代表理事の虎岩雅明さんによる「まちの『こんにち』を目指して——あみっぴい誕生まで」、そして「地域SNSの現



本大会前日の「山武分科会」ではインターネット中継で兵庫県企画県民部長の牧慎太郎さんが登場した。

状と発展の方向性」をテーマにした国際大学グローバル・コミュニケーション・センター主任研究員で地域SNS研究会事務局の庄司昌彦さんによる講演が行われた。

虎岩さんは講演の中で「SNSを立ち上げたのは街の中で豊かになるため。増やすのはアクセス数ではなく「こんにちは」と挨拶できる人の数」「あみつびい」は「出会い系」ではなく「出会った系」と説明した上で「SNSは携帯電話と同じ。友だちがいなければ携帯電話は鳴らない」「地域を活性化するのはリアルな人間関係。SNSが地域を活性化しても仕方ない」と指摘した。

昼食時、パネル・ポスター展示会

場を覗くと、エプロン姿の女の子から「コーヒーどうぞ」と紙コップを手渡された。千葉県松戸市の地域SNS「ラブマツ」の小中学生の参加者だという。コーヒーはSNS上に書き込まれた「ラブマツのコーヒー

がある」と良いですねの一言に触発された喫茶店主が開発した「ラブマツブレンド」。聞けば他にも「ラブマツリング」(手でもって食べられるドーナツ型のとんかつ)や「ラブマツバーガー」などのご当地グルメが続々と誕生しているようだ。

「ラブマツ」では参加者の交流会も盛んだ。「オン会」は3月19日で100回を迎えた。管理人を務めるフオークソノミー株式会社代表取締役の榊原直哉さんによれば、「実際に人に会う時間を大切にしたいのでオンタイムのオンを取ってオン会とした。ネット上だけの関係に終わらない、地元を知り、人を知るための最初のきっかけ作りの場所だと考えている」とのこと。08年度には文部科学省の委託を受け、「地域SNSを活用した家庭教育支援に係わる調査研究事業」を実施した。

ツイッターもSNS?

午後は2会場で4つの分科会が開かれ、各分科会での議論はメインセッションへと集約された。

中でも異色だったのが「地域における新しいツールとビジネスの関係」。「Twitter、動画中継などをどう使うか」をテーマにした分科会で紹介された秋田県横手市の「Yokoter」だ。目指すは「Twitter」を活用した街おこしだという。

「Yokoter」代表の細谷拓真さんは発表の中で、「なぜTwitterなのか」という問いかけに対して、「強み」をつなげていった結果だ」と言い切った。最大の強みはTwitterの機能のひとつである「ハッシュタグ」。Twitter利用者に、横手市に



インフォミーム株式会社代表取締役の和崎宏さんは「他地域のSNSサイトとの連携の促進」などを政策提言にまとめて紹介した。

関する発言中に「#yokote」とタグを付けてもらうだけで「集合知」としての利用が可能となる。詳細は公式サイト (<http://yokoter.com/>) を参照されたい。

同じ分科会の発表者でもあるSNSエンジン「OpenPNE」の開発者で株式会社手嶋屋代表取締役の手嶋守さんは、「TwitterもSNSの一部だと考えている」とした上で、「140文字という潔さや携帯電話などから気軽に利用できるシンプルさは日本人と日本語に向いているのでは」と述べた。また、自社のSNSエンジンに関して最新バージョンで「ふるさと納税」に対応したほか、次はクラウド・コンピューティングへの対応を行うとした。

「地域を元気にするICTの使い方」をテーマにしたメインセッションでは、総務省情報通信国際戦略局情報通信政策課長の谷脇康彦さんが「今後ベストプラクティスは点から横展開となる」と述べ、地域間連携の重要性や「ICTふるさと元気事業」について詳説した。

なお、第7回地域SNS全国フォーラムは、今年秋に静岡県掛川市での開催が決定している。

(フリーライター/杉元政光)